

## 通し矢競技の実施時期に関する一考察

入江 康平

### A Study on the Appropriate Seasons of Toshiya Competitions

IRIE Kohei

Toshiya is a kind of long distance shooting at a distance of 118 meters through 5 meters high and 2,2 meters wide passage at the verandah of the "Sanjyusangendo" Temple's in Kyoto and Edo (Tokyo).

Toshiya started in the beginning of 17 century and was practised until the middle of the 19 century as a kind of competition prosperously.

Archers improved their shooting skill, their instruments and the way of their training in order to set better records.

The records of Toshiya was very affected by the seasons and weather conditions, because the verandah was opened and the used time was very long, (the longest time 24 hours, the shortest time 1 or 2 hours).

This study examine this question under the following points of view.

A—Collecting and analysis of the previous old literatures.

B—Analysis of the time of the years in which Toshiya was mostly practised.

C—The comparison between the weather conditions of Kyoto and Yokyo.

The exact data of weather conditions in Edo era are not available, so I used the corresponding data of present-day.

The results

- ① It is referred in the previous old literatures that the best season for carrying out Zendo-Oyakazu (shooting a great number of arrows at the distance of 118 meters in the time of 24 hours) is from the end of April until the beginning of May in the lunar calendar.
- ② The time of real peak of Zendo-Oyakazu competitions was from the end of May until the beginning of June in the solar calendar.
- ③ The first peak of Hyakusha (shooting 100 arrows through this verandah) was from the middle of May until the middle of June, and the second peak was from the end of October until the middle of November in the solar calendar.
- ④ The temperature, the amount of rain, the during of day and night time and the direction of the wind in Kyoto and Takyo (Edo) are totally examined with the result that the point ① until ③ are appropriate.

**Key words:** History, Budo, Kyudo

## 1. はじめに

堂前、堂射などと呼ばれ、江戸時代前～中期を中心に京都三十三間堂や、浅草(後に深川)三十三間堂で盛んに行われた通し矢は、わが国の武道史やスポーツ史を研究する上でさまざまな問題をわれわれに提起してくれる。

この通し矢に関する史資料としては、弓術関係を中心として当時の地誌、風俗記事、見聞録、随筆、日記、歌、絵画などに数多く散見することが出来る。また、代表的な先行研究としては今村嘉雄著『十九世紀に於ける日本体育の研究』<sup>7)</sup>や石岡久夫著『近世日本弓術の発展』<sup>2)</sup>『京都三十三間堂通し矢の分析的研究』<sup>3)</sup>『江戸三十三間堂通し矢の分析的研究』<sup>4)</sup>『通し矢を中心とした諸藩の弓道史』<sup>5)</sup>などがあり、また概説書としては『弓道及び弓道史』<sup>8)</sup>『現代弓道講座』<sup>9)</sup>などをあげることが出来る。

通し矢は森川香山の「六品」<sup>注1)</sup>や平瀬光雄の「五射六科」<sup>注2)</sup>の考え方の射術の内、遠矢前と繰矢前を組み合わせたもので、速射・遠射・耐久射の能力が要求される射の一種である。

江戸幕府創業以来、年を経るとともに戦国の気風も次第に薄れ、武術は実利的性格を失い、華法化・形骸化の傾向にあったことは多くの武術史研究の一致する見方である。

このような風潮の中で、当時いわゆる“観徳”“武用”<sup>注3)</sup>を基本理念としていた弓術界において、通し矢が一定のルールのもとに公開の場で公正な審判により具体的な記録を争うという競技目的をもって行われたということは、出場者が武士階級という特定の身分に限定されていたという点では問題はあるが、今日われわれが理解するスポーツを規定する重要な条件を既に具備していたという点で、多分に現代的意義をもっているといえよう。

身分が固定化する当時の社会の中で、この競技ですぐれた成績をあげた射手は、経済的にも身分的にも有利な条件が準備されている数少ない場でもあったため、弓を手にする才能ある武士は記録更新を目指し激しいトレーニングを重ねたのである。

通し矢が競技的性格を鮮明にすることにより、ルールが整備され、好記録を出すことを目的として射法・射術、用具、トレーニング法などにさまざまな創意・工夫が凝らされるようになる。

現代スポーツにおいても一般的にいう屋外で数量的な記録を競うようなスポーツでは競技時の気象条件が大きく左右することはいうまでもない。競技時間の長い場合はなおさらのことである。したがって、実施時期や競技日時の気象条件の善悪は記録の良否に重要なウエイトを占めることは自明の理である。

さて、通し矢の競技場は半屋外であり、しかも通し矢の華である全堂大矢数の場合競技時間が24時間である。また最短競技時間であると考えられる百射種目でも1～2時間はかかるであろうと推測される。したがって出場にあたってはその時期や競技日の気象条件の善悪は矢の通否に大きな影響を与えることから、関係者は実施日の選定に意を払ったであろうことは想像に難くない。

そこで、本稿では通し矢に関する総合的研究の一環として、その実施時期に関連する先行文献の蒐集検討、通し矢の実際の実施時期の分析、さらに京都及び東京の気象条件をみることによって、当時通し矢に挑んだ関係者達が選定した実施時期の妥当性の可否について気象条件との関係に限定し考察を加えようとするものである。

なお、本論文で使用する気象データについては、江戸時代のものが入手出来れば理想的である。現在のところ古気候学では地球規模や数千年～数万単位での気候変動の研究は行われており、またわが国の古気候についても膨大な点数の古文書からの復元作業が行われているが、未だそのミッシングリンクを十分に埋めるまでには至っていないのが現状である。したがって本論文で使用する気象データは現代のものを使用せざるを得ず、この点限界があったことを付記しておく。

## 2. 通し矢の概要

通し矢の歴史については前掲した各先行文献に述べられているので、本稿では紙数の関係上省略し、ここではその競技の概要について述べる。

1) 競技場—南北に長い京都三十三間堂の西外縁を競技場とする。縁幅約2.2m、高さ4.5～5m、長さ約118mある<sup>注4)</sup>長大な空間を南から北へ射通すものである。後に江戸(最初浅草、後深川)にも京都三十三間堂を模した通し矢競技専用の施設<sup>注5)</sup>が建立され、また和歌山、名古屋、仙台など雄藩でも専用の稽古場が設置された。

2) 競技法と競技種目—普通通し矢といえは堂

西外縁の南端から北端までを夕方6時よ翌夕方6時まで24時間かけて射続け、その通り矢数を競ういわゆる全堂大矢数を指すが、後には記録の頭打ち<sup>注6)</sup>や、世間の関心や興味を繋ぐためか①射距離②競技時間③射数④年齢などの組み合わせにより次のような種目<sup>注7)</sup>が行われるようになった。

《京都》 14種目<sup>注8)</sup>

大矢数—全堂大矢数・五十間大矢数・半堂大矢数

日矢数—全堂日矢数・半堂日矢数

夜矢数—全堂夜矢数・半堂夜矢数

百射—全堂百射・五十間百射・半堂百射

五百射—全堂五百射

千射—全堂千射・五十間千射・半堂千射

その他—帳前・射初

《江戸》 23種目

大矢数—全堂大矢数・五十間大矢数・四十間大矢数・半堂大矢数

日矢数—全堂日矢数・半堂日矢数

夜矢数—全堂夜矢数・半堂夜矢数

百射—全堂百射・六十間百射・五十五間百射・五十間百射・四十五間百射・四十間百射・半堂百射

五百射—全堂五百射

千射—全堂千射・六十間千射・五十五間千射・五十間千射・四十五間千射・四十間千射・半堂千射

その他—帳前・射初

3) 審判—日置流七派(後に六派)<sup>注9)</sup>より出た審判員(堂見)達によって通り矢か否かを判定するが、選手と同じ派の審判員は一の采はふらない。そして最終的には蓮華王院の別当松井家の認定を受けて公式記録となるのである。

4) 通し矢の特徴—江戸初期頃までの通し矢は仏前で自己の技量を試すことを目的とするものであったが、後に通り矢数を争う競技の性格を帯びるようになり、新記録を出すことが唯一の目的となっていく。したがってこの通し矢はアレンゲートマンがあげた現代スポーツの特質<sup>1)</sup>の中の技能の数量化、記録万能主義的な性格を明確に持っていたといえよう。

### 3. 通し矢の実施時期に関する先行文献について

古文獻では実施時期についてどのように述べているかをみてみよう。筆者の管見によれば次のよ

うな記述がみられる。ただし、これらの記述は京都を念頭においたもので、しかも大矢数種目を前提としたものと考えられる。なお、いずれも陰曆表記である。

・資料1 「矢数の時節は4月の下旬、五月節句前後がよい。大矢数は夕方6時より開始し、夜間も射続けるので、夜の寒湿により人によっては腹痛をおこすことがあるので、火鉢で射手を暖めるのがよい。また温石で腹を冷さないようにするとよい。5月中旬を過ぎると昼間湿度が高くなり、弓の調子や破損、また射手の疲労も強くなる。また梅雨に入るとさらに条件は悪くなる。」(『矢数師資問答』<sup>10)</sup>)

・資料2 「実施日は3月が良いというが、3月上旬までは風は荒く吹き上げる。3月下旬から4月中旬までは風和らかく吹き上げる気候なので、条件として適している。(和佐)大八が新記録を出した時<sup>注10)</sup>は3月下旬に上洛し4月に堂に上がった。4月は初夏にかかる頃で、風の吹く味(方向や強弱の意か)が安定しており、行射するにも適した気温である。」(『極秘伝吉田流三光之書』<sup>14)</sup>)

・資料3 「矢数は4月下旬より5月上旬、または20日までが最適である。3～4千本程の矢数であれば弓力に頼る関係上4月中がよいが、競技時間も長くなり、夜間にかかる、気温も低くなり腹痛をおこしたり弓の調子も違ってくる場合がある。弓力に頼らず射術を活かすことの出来る上功の射手で、記録の更新を狙うことを目的とするのであれば5月上旬中旬頃がよい。」(『極秘伝吉田流三光之書』『大和流弓道地之巻四段第一』<sup>16)</sup>)

・資料4 「日矢数は4月が最適である。大矢数は夜間も射続けるので夜寒を避ける必要がある、実施日は5月1～3日を最上とし、4～6日を上、7～10日頃を次とする。この間の晴れた日を選びなさい。この頃は夜間寒くないので身も硬くならず、暑くもないのでよたることもない。弓の状態も寒暑による

変化の少ない時期でもある。ただ、5月は天候が不安定なので、(比較的安定している)4月下旬がよい。『矢数精義書』<sup>13)</sup>)

以上の資料をまとめるとおよそ次のようになる。

- 資料1 4月下旬～5月5日頃まで  
(5月中旬以降は湿度の関係上問題あり)
- 資料2 3月下旬～4月中頃頃まで  
(3月上旬までは風が強いので問題あり)
- 資料3 4月下旬～5月中頃頃まで  
(競技時間の長い種目は5月上・中旬がよい)
- 資料4 4月下旬～5月上頃頃まで  
(暖かさでは5月、天候の安定度では4月下旬)

総合的にみると、資料1・3・4は一致してその実施時期を射手の体調の維持や弓具のコンディション保持のために比較的寒暑湿燥の安定していると思われる4月下旬から5月上旬を選ぶべきであるとしている。資料2のみが時期的に資料1・3・4と相違するが、もし同資料の中で述べているように筆者が大八の驚異的な新記録樹立の季節、すなわち4月27日頃をよしと考えているのであれば、貞享3年は閏3月があるため、資料1・3・4とさほど時期的に大差ないことになる。

なお、ここに示した時期は陰暦である。陰暦と陽暦のズレは年によっても相違するが、おおよそ25日～50日の差がある。したがって石岡が「この月称は陰暦であるから1ヶ月順送りに考えて見ると……」<sup>6)</sup>という単純なものではない。

#### 4. 通し矢競技の実施時期の分析

それでは実際の通し矢の実施時期はどうであったろうか。幸いにして通し矢の実施記録は今日『矢数帳』の中はかなり詳細に残されている。ここで『矢数帳』の概略について述べ、この資料を手掛かりに実際の実施時期についてみてみよう。

通し矢に関する史資料をみると保元年中に蕪坂源太がこれを行ったとする記事を嚆矢とし、また通し矢の記録としては慶長11(1606)年の浅岡平兵衛を筆頭とする『矢数帳』をあげるのが一般的である。いつの頃からか通し矢を行った射手は演武後実施年月日、藩名、姓名、矢数、堂見(審判員)名などを記した扁額を堂軒下に掲げることが通例になっていったらしいが、この競技が巷の人気をあつめるようになり、また射手の通し矢数が注目

されるようになったことから、関係者から強い要望があったのであろうか、この扁額を基に『矢数帳』として版行されるようになった。一見無味乾燥とも思える通し矢の記録簿が新しい記録を追加しながら刊行物として版を重ねたということは、この通し矢が如何に当時の人々から関心をもたれていたかの証左ともなろう。

筆者の管見によれば江戸期を通して下記のような『矢数帳』が刊行されており、射手名、所属、師範、後見人、種目、惣矢数、通り矢数等が年月日順に記されている。

#### 《京都関係》

- 1) 『矢数之記』  
慶長11年正月19日～寛文7年5月3日まで
- 2) 『年代矢数帳』  
同 上 ～寛文9年4月まで
- 3) 『年代矢数帳』  
同 上 ～寛文9年6月11日まで
- 4) 『矢数帳』  
同 上 ～寛政5年4月24日まで<sup>15)</sup>
- 5) 『京都三十三間堂矢数帳』  
同 上 ～享和3年10月まで
- 6) 『京都大仏三十三間同矢数由来記』  
同 上 ～文化7年4月18日まで
- 7) 『三十三間堂矢数帳』  
同 上 ～文化8年まで
- 8) 『年代矢数帳』  
同 上 ～文久元年5月まで

ただ、これより約2世紀も以前の応永年間から慶長年間までの通し矢の記録帳が別に存在する。外題『京都三十三間堂通矢明細記』、内題『蓮華王院三拾三間堂通矢之記』と名付けられた写本<sup>11)</sup>で、約947名の射手名、出場年月日、射手名、国名、矢数等が記録されている。実施種目については特に記していないが、通し矢の歴史からいってすべて全堂大矢数であろうことは想像に難くない。

矢数についてこの『京都三十三間堂通矢明細記』をみると「通矢」として1本から51本の記録がみられ、特に同資料の末尾に慶長4年、吉田五左衛門以下4人が各千射を射、125本射通したことが記されている<sup>註11)</sup>ことから、既にこの頃から通り矢数を競う兆候があったと考えられる。なお、『京都三十三間堂通矢明細記』と『矢数帳』には年代として慶長11～13年の3年間の重複があるが、両資料に記載されている人物名の重複は慶長

11年正月19日(『明細記』では18日)の浅岡平兵衛一人のみである。

以上のことから京都における通し矢の実施時期の分析をするにあたっては、『京都三十三間堂明細記』並びに上の表の内、8)の生弓斎文庫蔵『年代矢数帳』を底本とし、これに3)『年代矢数帳』(東北大学図書館蔵本)と、7)『三十三間堂矢数帳』(国立東京博物館蔵本)を校合したものを使用した。

江戸三十三間堂関係の『矢数帳』としては筆者の管見によれば次のような木版物が刊行されており、9)の元治元(1684)年4月板が最終版と考えられる。

《江戸関係》

- 1) 『三拾三間堂由緒書』  
正保2(1645)年4月13日～宝暦5年3月まで
- 2) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～宝暦5年3月まで
- 3) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～寛政12年4月まで
- 4) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～享和2年4月まで
- 5) 『江戸深川三十三間堂矢数帳』  
同上 ～文化6年5月まで
- 6) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～文化14年まで
- 7) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～文政4年まで
- 8) 『江戸三十三間堂矢数帳』  
同上 ～天保10年4月15日まで
- 9) 『江戸深川三十三間堂矢数帳』  
同上 ～嘉永7年2月まで
- 10) 『江戸深川三十三間堂矢数帳』  
同上 ～元治元年4月まで

ただ、ここに写本であるが、慶応(1866)2年4月9日までの記録が掲載されている資料がある。

『東都三十三間堂矢数帳』と題する冊子で、現在深川の正覚寺<sup>注12)</sup>が所蔵している。そこで、江戸における実施時期の分析にあたってはこの『東都三十三間堂矢数帳』を底本とし、9)『江戸深川三十三間堂矢数帳』(生弓斎文庫本)と校合したものを使用した。

なお、本論を展開するにあたっては便宜上京都関係については①応永年間～慶長年間(『明細記』記載分)を「京都前期」、②慶長年間～文久年間を

「京都後期」、③「江戸」の3つのブロックとした。

(1)採用した記録簿に掲載されている総人数と実施年月日の判明人数は次の通りである。

	総人数	実施年月日の判明人数
①京都前期	947	404
②京都後期	824	704
③江戸	560	550
計	2331	1658

(2)実施年月日判明者の種目別人数の内訳をみると表1のようになる。

(3)表1を①京都前期②京都後期③江戸別に、その実施時期について見てみよう。図1は日別実施表を作成し、さらにそれを5日毎にまとめグラフ化したものである。なお、以後本稿で使用する月日はすべて陽暦に換算<sup>注14)</sup>しなおしたものを使用した。

さて、この図1をみると通し矢の実施時期の傾向として次のようなことがいえよう。

A ブロック別傾向

- ①「京都前期」においては4月上旬から6月上旬までに第一のピーク、10月下旬から12月上旬にかけて第二のピークがある。第一のピークについて江戸後期の第一ピークと比較すると、時期として1～2旬早いことがわかる。これは「京都前期」時代がまだ競技的性格を持っていなかったため、昼夜の長さを特に考慮する必要がなく、日中のコンディションの良い季節を優先したためと考えられる。
- ②「京都後期」においては5月中旬から6月下旬に集中しており、中でも5月下旬から6月上旬の期間が最盛期であることがわかる。これは同期の通し矢が競技間性格を持つようになったため、特に昼夜の長さや気温を重視したためではないかと考えられる。
- ③「江戸」においては5月中旬から6月上旬に第一のピークがあり、また10月下旬から11月下旬にかけて小さいピークがみられる。これは江戸では実施総数の内、67%が制限矢数種目であるという理由からであろうと考えられる。因みに「京都後期」における制限矢数種目は全体のわずか28%であった。

B 全体的傾向

- ①実施時期数としては4月上旬頃から次第に増加し、5月下旬から6月上旬をピークとして

表1 実施年月日判明者の種目別人数の内訳

		①京都前期	②京都後期	③江戸	計	
制限時間 種目	24時間	・全堂大矢数	404	479	115	998
		・半堂大矢数	—	5	21	26
		・四十間大矢数	—	—	2	2
		・五十間大矢数	—	1	1	2
	12時間	・全堂日矢数	—	21	30	51
		・半堂日矢数	—	2	6	8
		・全堂夜矢数	—	—	4	4
		・半堂夜矢数	—	—	1	1
制限矢数 種目	100射	・全堂百射	—	53	73	126
		・半堂百射	—	2	27	29
		・四十間百射	—	—	17	17
		・四十五間百射	—	—	7	7
		・五十間百射	—	3	13	16
		・五十五間百射	—	—	5	5
		・六十間百射	—	—	6	6
		・全堂五百射	—	1	1	2
	1000射	・全堂千射	—	128	124	252
		・半堂千射	—	8	46	54
		・四十間千射	—	—	27	27
		・四十五間千射	—	—	2	2
		・五十間千射	—	1	9	10
		・五十五間千射	—	—	2	2
		・六十間千射	—	—	1	1
		・帳前	—	—	6	6
計		404	704	546	1654	

※「矢数帳」に15歳以下と記され、種目が不明の場合は「半堂」扱いとした<sup>注13)</sup>。

※江戸において射損じが4名いる。

※射初について江戸堂で11名が行っているが、特に季節と関係なく、堂の修・改築の折に実施されたものなので対象としなかった。

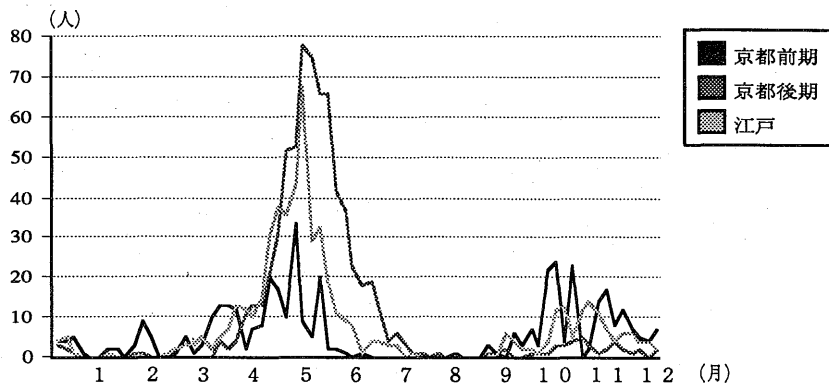


図1 京都前期・京都後期・江戸における実施時期と総人数

7月上旬にかけてゆるやかに減少している。

②月別にみると総実施数の約35%が5月、27%が6月に行われており、旬別にみると5月下旬から6月上旬に総実施数の約31%が実施されている。また1月中・下旬、8月、9月前半はほとんど行われていない。

③10月下旬から12月上旬にかけて第二のピークがみられる。

(4) 前述したように半屋外で長時間行う競技の場合、気象条件への配慮は不可欠である。通し矢は大別して時間制限と距離の組み合わせによる種目と、制限時間と距離の組み合わせによる種目とがあるが、大矢数では24時間という長い競技時間であること周知の通りであり、最も短い競技時間であると考えられるのが百射種目である。実際にどれ程の時間を要したかについては不明であるが、すくなくとも1～2時間は必要と考えられる。

そこで、次に競技時間及び制限矢数別に各種目の実施時期の実際についてみてみよう。図2-1

～図2-4は表1をさらに制限時間種目(競技時間24時間＝大矢数、12時間＝日矢数/夜矢数)と制限矢数種目(千射、百射)を実施時期別にまとめたものである。

《制限時間種目》

イ) 図2-1 大矢数の実施時期について

①「京都前期」については図1と同様4月上旬～6月上旬にかけて第1のピークがあり、10月下旬から12月上旬にも第1ピークに近いピークが見られる点が京都後期、江戸にない特徴である。

②「京都後期」は5月中旬から徐々に増加し、5月下旬から6月上旬をピークとし、6月下旬にかけて減少している。

③「江戸」は「京都後期」と比べ実数としては少ないが、傾向としては類似している。

ロ) 図2-2 日(夜)矢数の実施時期について

①「京都後期」「江戸」のいずれも実数が少な

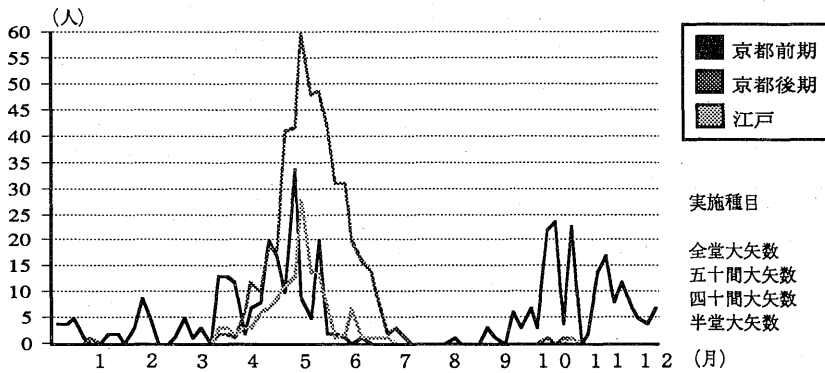


図2-1 制限時間別実施時期と人数(大矢数)

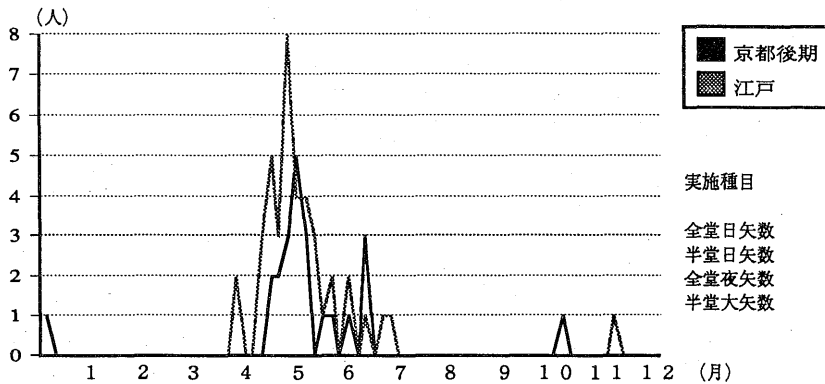


図2-2 制限時間別実施時期と人数(日・夜矢数)

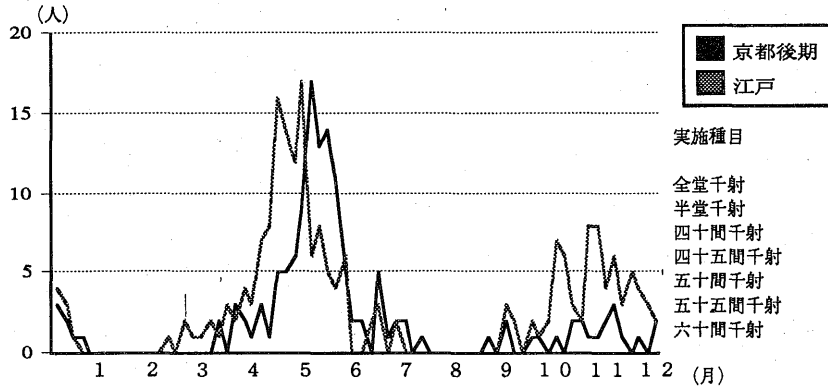


図2-3 制限矢数別実施時期と人数(千射種目)

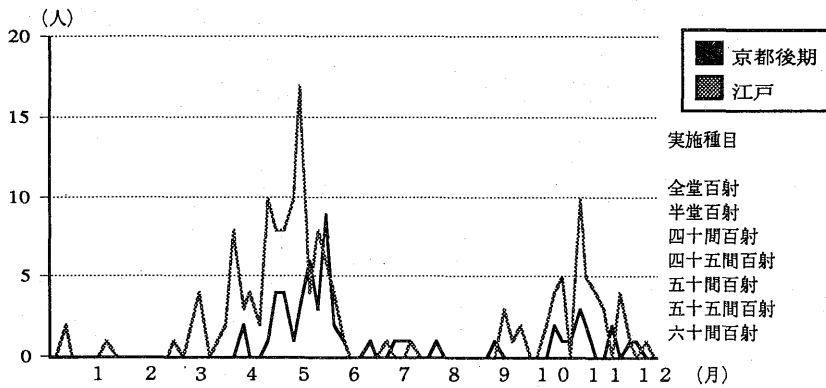


図2-4 制限矢数別実施時期と人数(百射種目)

いので、その特徴をみることは困難であるが、合計した実施時期の傾向としては5月中旬から6月上旬に多く実施されている。

以上のことから、「京都前期」では矢数が少ないため、日中の気温や天候の落ち着いた時期を優先し、「京都後期」、特に大矢数では夜間の気温と昼夜の長さを第一に考慮していたのではないかと考えられる。

#### 《制限矢数種目》

イ) 図2-3 千射の実施時期について

- ① 「京都後期」は4月中旬から5月下旬にかけて5日毎の実施実数を見ると3～5人の横這いであるが、6月上旬～中旬に急激に増加しており、9月中旬から12月下旬まで1～3人で推移している。またその実数はわずかであるが1月前半に実施していることが目につく。
- ② 「江戸」では3月中旬からはじまり、徐々に

にその数を増やし、5月中旬から下旬にかけて急増している。また9月下旬から12月下旬までの間、10月下旬・11月中旬の2つの小さなピークを持ちながら5日毎の実数として2～4人がこの種目を行っている。

- ③イ)の①②を総合すると、京都と江戸の第1ピークを比較すると2旬程京都の方が遅い。第2ピークは京都・江戸ともに類似した傾向を示している。

ロ) 図2-4 百射の実施時期について

- ① 「京都後期」では4月下旬に始まり6月初旬～中旬にピークがあり、以後12月下旬まで5日毎の単位で見ると1～3人ではあるが、コンスタントに実施されている。
- ② 「江戸」では5月初旬～6月中旬にピークがみられる。また「京都後期」と比較し、10月下旬～11月中旬にはっきりとした第2のピークがあるのが特徴といえる。



以上のことから、制限矢数種目は制限時間種目と比べて競技時間が短いことから日中の気温や天候の安定した秋にも多くの射手が挑戦したものと考えられる。

(5) 記録更新の実施時期について

通し矢は慶長初期より時代が下がるにしたがい、通り矢数を競う性格を帯びようになり、多くの射手は記録更新を唯一の目的として堂に上った。図3-1は旬別に各種目毎の新記録を出した時期をまとめたものである。この図をみると、

- ①「京都」では5月中旬～6月中旬にピークがみられるが、「江戸」では5月下旬が他の時期に比べて多く、95の記録更新数の内23(24%)がこの時期である。
- ②全体的にみて記録更新が最も多く行われた時期は5月下旬であり、5月中旬・6月上旬がこれに続く。

また図3-2は競技時間の最も長い種目である大矢数と最も短い種目である百射の記録更新時

期をまとめたものである。両種目を比較すると、百射種目において11月上旬から12月上旬に第2のピークがみられる。

全体的な傾向としては出場者人数の動向と符号するが、競技時間の長短により実施時期に特徴がみられるといえよう。

5. 気象状況と実施時期の関係について

これまで通し矢の実施時期について、実際に通し矢に携わった人々がどのような時期を適当としているかについて先行文献の記述をあげ、次に『矢数帳』の分析をすることにより実際に行われた時期をみてきた。果たして実施時期としてはいつ頃が適当なのであろうか。通し矢に携わる人々の設定した実施時期は妥当なものであったらうか。この点については当時の気象状況が判明すればよいのであるが、現段階では難しい。現在、歴史学と気象学の両面から古い時代の気象状況を浮き彫りにしようとする試みが行われているが、これには

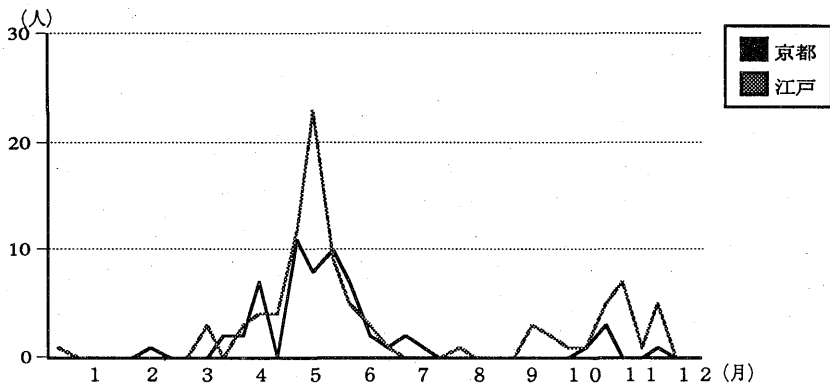


図3-1 京都と江戸の旬別記録更新の時期

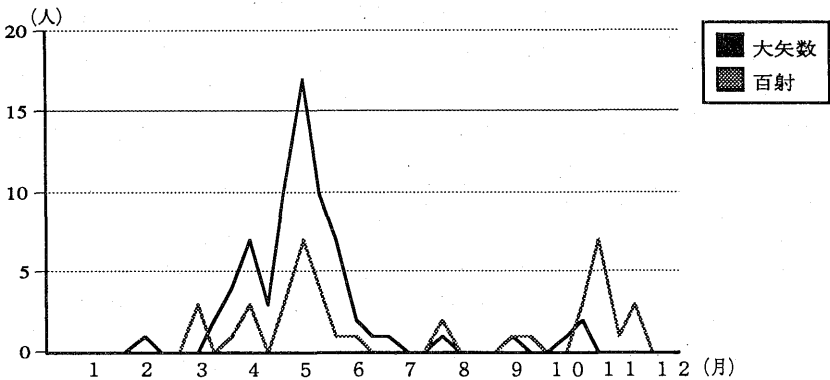


図3-2 旬別記録更新の時期(大矢数・百射の比較)

膨大な史資料の蓄積が必要であり、今日まだその成果は出ていない。

気象状況は大きな周期で微妙に変化しているとされる。しかし江戸時代の気象状況がどのようであったかは残念ながら現在の古気候学でも明らかにされていないが、現代の気象状況とは大きくは変わらないと考えられるので、今日まで蓄積されている気象データを参考に、京都及び東京の気象状況をおおよそについてみることにより、通し矢の実施時期の問題について考えてみよう。なお、1・2・3・7・8月は通し矢を行う時期としては不適切である<sup>注15)</sup>と考えられるため、以下にあげた気象データからはあらかじめ省略した。

#### 1 京都及び東京の気象概況<sup>注16)</sup>

京都………京都は近畿北部に位置し裏日本の気候を呈する。春は3月下旬より急に温度が上昇し、4月は晴天が続くが、西高東低の冬型の気圧配置(寒の戻り)となり荒れることがある。5～7月には寒冷前線の通過などで急に天候が崩れることがある。9月中旬から10月中旬にかけて秋霖前線や台風の影響を受け雨が多くなり、10月になると気温も次第に下降し裏日本特有の時雨が降るようになる。また11月前半は秋日和が続くが、その後冬型の気圧配置となり季節風が吹くようになり、12月に入るとさらに風が強まり、降雪をみるようになる。

東京………関東地方は関東平野を中心とし、北、西は山で囲まれ、南、東は太平洋に面し、海洋の影響を受けており、これを平野部、山沿い地方、南部沿岸地方、北部沿岸地方、更新地方にわけることが出来る。東京は南部沿岸地方の属し、黒潮暖流の影響を受け海洋性の温和な気候で、春は関東地方の中でも早く、夏の梅雨期の雨量も他地方より少ない。また秋は秋霖前線と台風の影響を受けやすいが、11月の月平均気温は13℃位で他地方に比較し暖かく、冬は乾燥した晴天が続き降雪量も比較的少ない。

#### 2 気温・日照時間・降雨量からの検討

図4-1～図4-3は1951年から1980年までの30年間の京都及び東京の気温・日照時間・降雨量の平均値である<sup>注17)</sup>。まず図4-1気温についてみると、全体として顕著な気温差はないといえるが、10月中旬から12月の間は東京の方が全体に高い。また、表2-1～2月別の最低・最高気温の平均をみる<sup>12)</sup>と、地理的關係か東京に比べて京

都の方が振幅が大きい。長時間の競技においては射手のコンディション維持に少なからず影響をあたえたであろうことが想像出来る。

また図4-2日照時間を見ると、6月前半、9月中旬～10月は京都の方がやや長く、11月下旬から12月をみると東京の方が京都よりかなり長いことがわかる。

わが国は地理的にいって太陽の高さが季節によって変化するため、夏至(6月22日頃)と冬至(12月22日頃)を最大とし昼夜の長さが相違する。特に競技時間の長い種目ではこのことは出場日を決める際の重要な条件となる。中世以来採用されてきた時刻法では夏至の頃の昼の1刻は2時間33分、夜の1刻は1時間22分、また冬至の頃の昼の1刻は1時間50分、夜の1刻は2時間10分である<sup>注18)</sup>という条件は、特に大矢数、日(夜)矢数の場合充分考慮に入れて実施時期を設定したであろうことは当然考えられる。

次に図4-3降雨量についてみると、4月～5月中頃、6月、9月中旬は京都が多く、また9月下旬～12月は東京の方が多い。殊に京都の6月後半と9月、東京の6月下旬、9月下旬～10月上旬は降雨量が多く、12月になると京都、江戸とも少ないことがわかる。

#### 3 天気の高率からの検討

図5は1951年～82年の30年間の天候の高率を示したものである<sup>注19)</sup>。京都で比較的天候の落着いているのは4月上旬、5月21～25日、6月6日～10日、10月～12月中旬であり、東京では4月上旬、5月下旬、10月中旬～12月下旬である。なお6月中旬以降、京都・東京ともに天候が崩れやすい傾向となる。これは当然梅雨を意味している。京都と東京では若干梅雨入りの時期にズレがあることは気象データからも明らかである。

#### 4 最多風向と日最大風速

現代の弓道競技でも遠的競技では風向や風力が射手の心理や矢飛びに少なからず影響を与えることは知られている。まして長時間にわたり射距離118メートルを射るとなれば、風向や風力が記録の良否を大きく左右したであろうことは想像に難くない。ここで京都及び東京の1953～66年の最多風向<sup>注20)</sup>をみるとおおよそ次のようである。

京 都                      東 京  
4月 NからNNWとほぼ NからSまで一定し

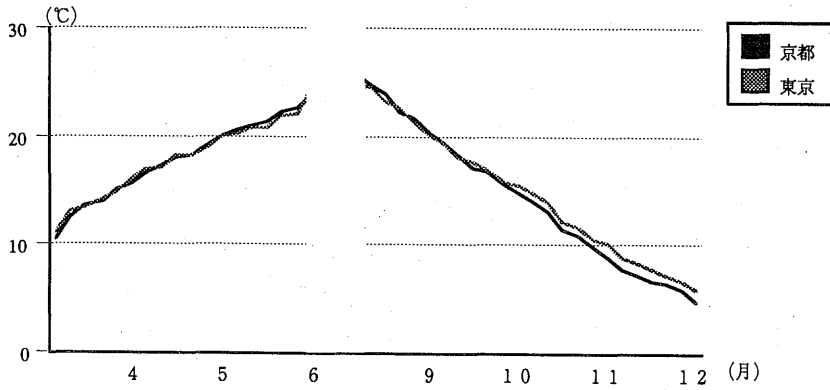


図 4-1 平均気温(1951-1980)

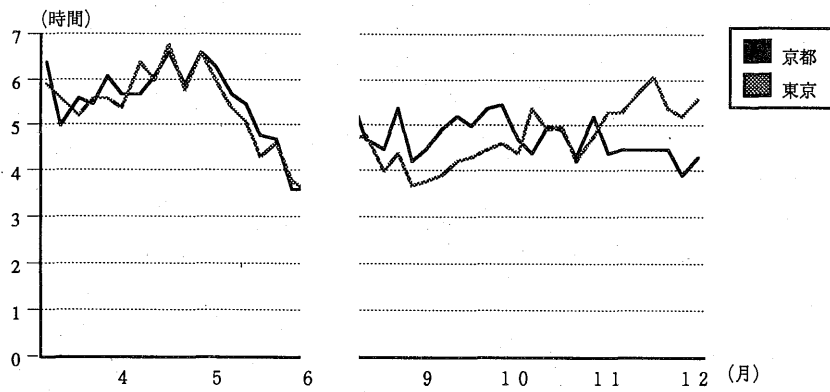


図 4-2 日照時間(1951-1980)

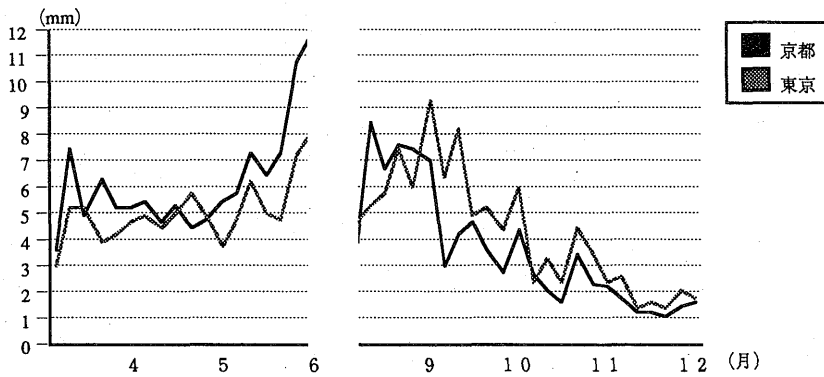


図 4-3 降雨量(1951-1980)

表 2-1 月別日最低気温の平均(°C) 1951~66

	4月	5月	6月	9月	10月	11月	12月
京都	8.3	12.8	16.6	19.1	12.5	6.5	1.9
東京	9.6	14.1	17.9	19.8	13.8	8.0	2.8

表 2-2 月別日最高気温の平均(°C) 1951~66

	4月	5月	6月	9月	10月	11月	12月
京都	19.4	23.9	26.9	28.4	22.6	17.3	11.9
東京	18.4	22.6	25.1	26.8	21.1	16.5	12.2

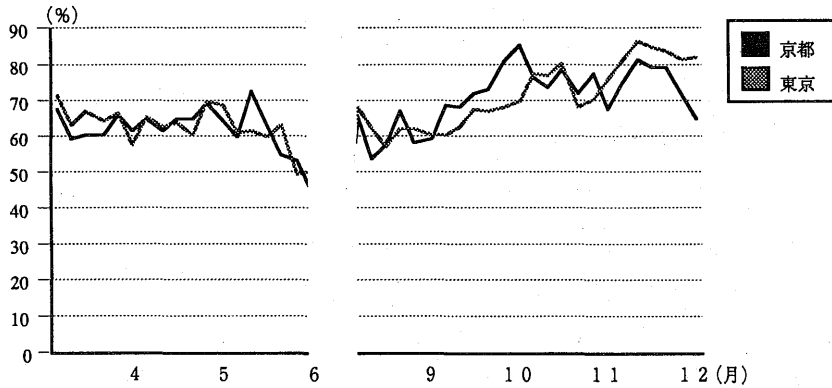


図5 天気の確率(快晴・晴・曇り)(1951-1982)

	一定している。	ない。
5月	Eもあるが、NからNEが多い。	SSWからSSEと一定している。
6月	NEが多いがSまで一定しない。	SSWからSと一定している。
9月	NWからNEと一定しない。	SもあるがNからNNWが多い。
10月	NからNNWが多い。	NからNNWと一定している。
11月	同上	同上
12月	NからNWが多い。	同上

三十三間堂が南北に長い建築物であり、北矢落ちの方向に発射することから、京都・江戸ともに5月、6月が風の影響を受けることが比較的少ないため行射しやすく、その反対に10~12月は射手に対してほぼ向かい風に近い形となるため行射に影響が出るとともに、矢の飛距離や方向性にもマイナスであったと考えられる。

風の強さはどれ位であろうか。表3「日最大風速」をみると年間を通して京都に比べ東京の方が強い。堂が深川に移って<sup>注21)</sup>からは図6に示したように、同地が深川八幡宮の東側を埋め立てた新地で、南・北・西が堀となっており、また南に東

表3 日最大風速(m/sec) 1951~66

	4月	5月	6月	9月	10月	11月	12月
京都	11.0	10.2	9.6	13.1	10.1	9.9	10.1
東京	14.5	14.2	12.6	16.9	12.8	12.9	13.3

京湾が近くにせまっているという立地条件からして、江戸時代の方が現代よりもっと強かったのではないかと考えられる。

### 6. まとめ

江戸時代初~中期を中心に京都や江戸で盛んに行われた通し矢(堂前、堂射とも)は、今日のスポーツや武道の在り方を考える上でわれわれに多くの問題を提起してくれる。この通し矢は技能の数量化、記録万能主義的な性格を鮮明に持った競技として行われ、当時の人々に人気を博したことから、関係者は記録向上を目指し新しい射法・射術・用具の開発、さらには競技に耐えられるためのトレーニング法の研究などに取り組んだ。

一方、通し矢は競技時間が最長24時間、最短でも1~2時間を必要とするため、競技季節や競技当日の気象状況は、記録の良否に大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。したがって、競技日の選定に対し関係者は少なからず意を払ったであろうと考えられる。

そこで本稿では通し矢の総合研究の一環として、その実施時期について、①先行文献の検討、②実際の実施時期の分析、③東京・京都の気象状況の検討を通して、先人の設定した実施時期の妥当性を考察した。その結果は次のようであった。

①先行文献の検討：蒐集した関連文献を検討した結果、いずれも通し矢実施時期として4月下旬から5月上旬(陰暦)が最も適しているとする点で一致している。

②実際の実施時期の分析：通し矢の実施記録を京都前期(応永~慶長年間)、京都後期(慶長

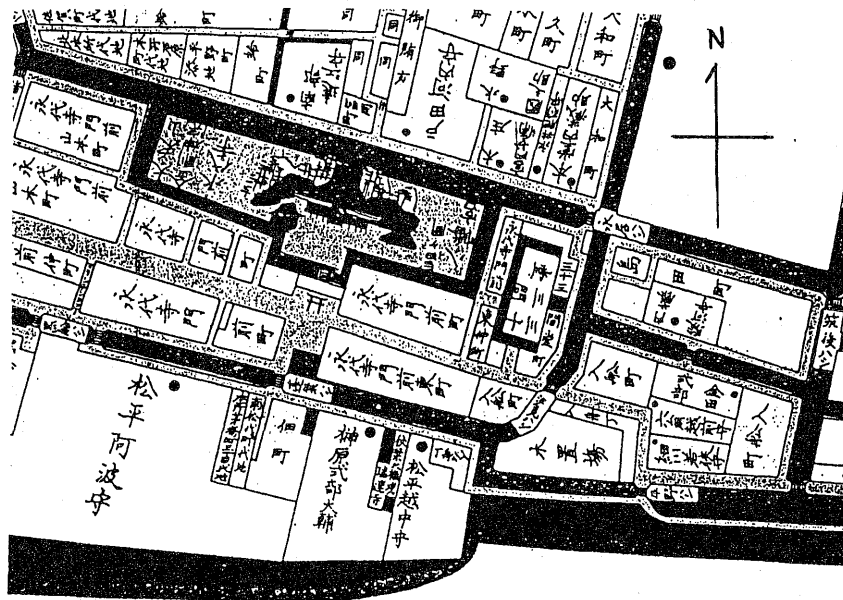


図6 文久2年版「本所深川絵図」

～元治年間), 江戸(正保～慶応年間)にわけて分析した結果, その傾向はおおよそ以下の通りであった。

- 1) 全体的には4月上旬頃から次第に増加し, 5月下旬より6月上旬をピークとし, 7月上旬にかけてゆるやかに減少している。
- 2) 制限時間種目では京都前期は4月上旬～6月上旬, 10月上旬～12月上旬と広がりがある。これに対し京都後期・江戸では5月下旬～6月上旬にピークがある。この理由としては京都前期時代は矢数も少なく, 仏前で自分の技倆を試みるということを目的としていたため, 昼夜の長さよりも日中の気温や天候の安定している季節を選んだ結果であり, 京都後期や江戸では通り矢数を競うという目的が中心となり, 長時間競技が多くなったため, それに適した時期として特に昼が比較的長く, 夜間の気温も行射に適した上記のような時期となったと考えられる。
- 3) 制限矢数種目は制限時間種目に比べて実施時期に広がりが見られる。これは矢数が少ないこと, すなわち競技時間が短いことからくるもので, この傾向は京都・

江戸ともにみられる傾向である。

- 4) 記録が更新された時期を全体的にみると, 旬別では5月下旬, 5月中旬, 6月上旬の順で多い。

③京都・東京の気象状況：

- 1) まず気温では, 全体として顕著な差はないが, 10月中旬から12月は京都の方が低い。また日別最高気温と最低気温の差も大きい。降雨量を比較すると4～5月中旬, 6月, 9月中旬は京都の方が, 9月下旬～10月上旬は東京の方が多い。
- 2) 風の向きは記録に影響を与えたであろうと考えられる。京都・東京とも5月・6月の風向は, 三十三間堂の立地条件からして年間の中で最も適しているといえよう。

先行文献では陰暦4月下旬から5月上旬をよしとしているが, 実際の実施時期を分析すると, 4月上旬頃から次第に増加し, 5月下旬より6月上旬をピークとし, 7月上旬にかけてゆるやかに減少する分布を示している。

京都・東京の気象状況を総合的に検討した結果, 通し矢を射る姿勢が安坐という特殊な姿勢であり, 殊に長時間の競技に耐えるための気象条件

しては、5月下旬より6月上旬を中心とする時期が適しており、多くの先人の行った時期が妥当であるとの結論に達した。

なお、陰暦と陽暦とは年によって25~50日のズレがあるので、厳密には先人の教えの時期が正しいか否かは判断できないが、陰暦と陽暦のズレの平均を1ヶ月と大雑把な見方をすれば、先人達がよしとする時期とほぼ一致するという点では異論はない。

今回の論文作成にあたり、通し矢の実施時期と江戸期の風俗や年中行事などとの関係についても意を払って資料の蒐集に努めてきた。しかし筆者の管見では現在の所特筆すべき資料は見あたらない。この点については今後さらに資料の蒐集・分析に努力したいと考えている。

## 注

- 注1) 森川香山著『大和流弓道教訓之巻』(承応元年-1652)によれば、六品として「一 射術としての前、指矢前、繰矢前、軍前の理形也、二 礼として色々様々な儀也、三 弓法とて弓矢の取扱それぞれの法也、四 弓器とて弓箭の品々をいふ也、五 弓工とて弓箭細工の事、六 四明の法とて暮目鳴弦の事也、この六を究知るを諸射手とも弓知りとも云也。」とある。
- 注2) 平瀬光雄著『射學要録』(天和元年-1788)によれば、「一 射術として巻葉前・的前・遠矢前・指矢前・要前、二 射儀、三 弓法、四 弓器、五 弓工、六 弓道」をあげ、これらを「悉く知り尽くスヲ弓道ノ達人トイフ」とある。
- 注3) 古代から中国では「射は観徳の器」という文射思想がみられ、これが今日のわが国の弓射思想にも大きく影響している。一方弓射は実利的、武射的性格を持ち長く尊重されてきた。注2)『射學要録』によれば、「蓋射ノ徳ヲ観ル固ヨリニシテ軍射ハ射ノ本武用ノ尤忽ニスベカラザルモノナリ。……夫レ射ハ六藝ノ一ニシテ観徳武用ノ技ナリ。……」とある。
- 注4) 編著者不明(宝暦3年-1753)写『射術選要集』(狩野文庫蔵)によれば、「……南射前北矢落東前西後ろ也。縁の虎口より虎口まで六十四間一尺八寸六分、……矢飛は六十三間四寸六分也。縁幅七尺三寸、一のたる木高さ一丈六尺五寸、二のたる木高さ一丈五尺九寸九分、楯形の高さ一丈四尺七寸八分、……」とある。
- 注5) 浅草堂は「東西凡四十八間余、南北百三十間余、堂は東に寄る。堂の西を矢場とし、其北方に的場を設く。……」(『府内誌殘編』)とあり、また深川堂も「南北凡六拾六間、其東面に千手観音像を安し、西縁を以て射場となす。……」(『東京通誌』)とある。元禄14(1701)年の『深川三十三間堂建地割繪図』(『東京誌料』収載)をみると、内陣の長さ六拾四間五尺三寸九分(約118メートル)、縁幅七尺四寸五分(約2、2メートル)、高さ二丈一尺八分(約5、7メートル)で、南北に長く建てられていた。ただ、江戸切絵図を現代の実測図に重ねあわせた『復元江戸情報地図』(朝日新聞社 1994)をみると、南北よりわずかに東西に振っている。
- 注6) 全堂大矢数は貞享3年、和左大八の通り矢8、133本(総矢数13,053)の驚異的大記録の樹立により、その後の射手は挑戦意欲を急速に失っていったことが『矢数帳』にうかがわれる。この見解について、1)の中でアレングートマンは「この行事(通し矢)は(和左の大記録樹立)以後156年も続けられたのであるから」時代錯誤な見方である(P93)としている。しかし、彼のこのような見解は通し矢における実施種目の詳細な動向についての認識不足からくるものである。
- 注7) 7)P244によると京都では11種目、江戸では21種目実施されたとしているが、これは日矢数、夜矢数の分類をしておらず、また全堂五百射種目が抜けているためである。したがって京都で14種目、江戸で23種目が実施された。
- 注8) 全堂=堂の西外縁の南端から北端までを射通す種目、大矢数=夕方6時より翌夕方6時までの24時間を競技時間とする種目、半堂=全堂の半分を射距離とする種目、日矢数=朝6時より夕6時までの12時間を競技時間とする競技種目、夜矢数=夕6時より翌朝6時までの12時間を競技時間とする種目、帳前=一本でも通した時これを札に記して堂に掲げることを許されることをいう。
- 注9) 仙台市博物館蔵『弓書覚下』(江戸中期写本)によれば、「諸国より射手集まり検議して七派に分りて一派に一人宛の堂見、七人たりしが吉田助左衛門派の堂見死して跡をつがざりしより六人にて勤来ぬ」とある。六派とは印西派、雪荷派、道雪派、竹林派、大蔵派、寿徳派をいう。
- 注10) 和佐大八が通し矢8、133本(総矢数13,53本)の新記録を出したのは貞享3(1686)年4月27日(陽暦6月17日)である。
- 注11) 「慶長4年三月十五日是より矢数射始  
吉田印西弟子 吉田五左衛門 浅野紀伊守内  
伴喜左衛門弟子 串田次左衛門 松平下野守内  
石堂竹林弟子 浅岡平兵衛 松平下野守内  
伴喜左衛門弟子 筒井傳兵衛  
吉田印西弟子 山口軍兵衛 松平三河守内  
右五人之矢数総矢者何茂千之内ヲ射る。通矢者百二拾五本宛射通す也。」
- 注12) 正覚寺 寛永6年の創建とされる。深川堂三十

三間堂の廃止については「地震後御修理あり、後又半破壊に及しままでありしが、此頃明治年5月御廃止に成れり。……」（『続武江年表』）とある。同堂の取壊しに際し本尊千手観音及び矢数帳・寺記類を浄土宗深川正源寺末である大音響山流院正覚寺に寄託したいきさつがある。

注13) 半堂の出場資格年齢は「十五歳より以下の童、堂の半より之を射る。是を半堂と名付る。式法本堂同然」（狩野文庫蔵『射術選要集』宝暦3年）によった。

注14) 天正10(1582)年10月15日以前はユリウス暦であるが、便宜上これをグレゴリオ暦に換算した日付けを使用した。換算の資料としては加藤興一郎編(1993)：『日本陰陽暦日対照表』上・下、ニッポ、野島寿三郎編(1987)：『日本暦西暦月日対照表』、日外アソシエートを使用した。

注15) 1, 2, 3月を省略した理由は、京都・江戸のいずれにおいても寒気(特に夜間)のある時期は、繊細な技術が要求される弓射において決して好ましい時期ではないことは自明の理である。また7, 8月を省略した理由は、長時間の競技において湿気矢暑さによる射手や鏢製弓のコンディション維持が難しいことからである。このことは【2通し矢の実施時期に関する先行文献について】の資料1~4からも充分推測出来る。

注16) 庭山四郎編(1983)：『日本気象総覧』下巻、第4章関東・甲信、宮本一夫 第6章 近畿、東洋経済新報社、及び岡林一夫・中島肇共編(1987)：『京都お天気歳時記』、かもがわ出版を参考とした。

注17) 表5は気象庁観測部統計課作成「要素別日別ファイル」(『日本気象総覧』上巻、東洋経済新報社(1983))のデータを旬別に集計したものである。

注18) 「中世以降わが国の時刻法は昼夜を6等分し、合わせて1日とするもので、季節によって1刻の長さが相違するという不定時法が用いられてきた。……中略……不定時法によると夏至の頃の1刻は2時間33分、夜の1刻は約その半分の1時間22分、その反対に冬至の頃の昼の1刻は1時間50分、夜の1刻は2時間10分である」。(岡田芳朗(1987)：『伝承の智慧 暦を読む』三修社、P.63。因みに京都における冬至の昼の時間は9時間49分、夏至においては14時間31分である。

注19) 気象庁観測部統計課作成「要素別日別ファイル」(『日本気象総覧』下巻、東洋経済新報社(1983))のデータを旬別に集計したものである。

注20) 気象庁観測部統計課作成「要素別日別ファイル」(『日本気象総覧』上巻、東洋経済新報社(1983))のデータを旬別に集計したものである。

注21) 江戸の三十三間堂は寛永19(1642)年浅草に建立されたが、元禄11(1698)年火災により焼失し、同14年深川に移転し再建された。『増訂武江年表』によれば、「(元禄11年)九月六日(陽暦10月9日)巳刻過ぎ、新橋南端町より出火、南風烈しく、大名小路、通町筋、神田、下谷、浅草、山谷、千住、掃部宿に至る。此の時浅草三十三間堂焼けて、元禄十四年に至り深川に立つ」とある。

## 引用文献

- 1) アレングートマン Allen Guttmann 清水哲男訳(1981)：スポーツと現代アメリカ From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports, TBSブリタニカ, 東京。
- 2) 石岡久夫(1993)：近世日本弓術の発展, 玉川大学出版部, 東京。
- 3) 石岡久夫(1969)：京都三十三間堂通し矢の分析的研究, 國學院大學体育学研究室紀要 1：5-17。
- 4) 石岡久夫(1972)：江戸三十三間堂通し矢の分析的研究, 國學院大學体育学研究室紀要 4：25-39。
- 5) 石岡久夫(1980)：武道, 日本武道館, 東京。
- 6) 注3), P8
- 7) 今村嘉雄(1967)：十九世紀に於ける日本体育の研究, 不味堂, 東京, pp.215-250。
- 8) 浦上 榮・斎藤直芳(1935)：弓道及び弓道史, 平凡社, 東京, pp.417-438。
- 9) 岡井 満(1969)：堂射, 現代弓道講座第3巻, 雄山閣, 東京, pp.134-180。
- 10) 観盛軒岡本英繁(文化六年-1909) 福島谷太郎(天保十二年-1841写)：大和流矢数師資問答, 福島家蔵。
- 11) 大佛御殿御普請方御役所(年代不明 江戸中期の写か)：蓮華王院三拾三間堂通矢之記 中央大学図書館蔵長谷川如是閑旧蔵書 なお、同名の別書が国立東京博物館に所蔵されている。同書は慶長11年の浅岡平兵衛を筆頭とするもので、「応永の後慶長の末までは別巻に委しく記す……」とあることから、中大本と前後(上・下)両編をなすものと考えられる。
- 12) 庭山四郎編(1983)：日本気象総覧, 上巻, 東洋経済新報社, 東京。
- 13) 広瀬彌一(年代不明 延宝~天和期か)：矢数精義書, 筆者蔵。
- 14) 編著者・年代不明(江戸中期のものか)：極秘伝吉田流三光之書, 筆者蔵。
- 15) 編著者不明：1枚刷り。
- 16) 森川香山(承応元年-1652)：大和流弓道地之巻四段第一, 筆者蔵。